

育児と仕事を楽しむ「スタイリッシュ」なワーキングマザーを目指して

日本経済新聞社 文化・事業局総合事業部 紅林真由美

「結婚→出産→退職」という図式は、現代の女性には当てはまらなくなってきた。しかし、まだまだ子どもを持ちながら、仕事を続けることは容易なことではない。ワーキングマザーのビジネススタイル、そしてライフスタイルは、皆それぞれ異なる。また、まだ参考になるような先輩ワーキングマザーの事例も少なく、それぞれが、走りながら「自分らしい」生き方を探している。しかし、確実にワーキングマザーは増加し、女性が働きながら、育児をする環境は、少しずつではあるが整いつつある。私は髪を振り乱しながら育児と仕事の両立をなんとかこなすというより、肩に力が入っていない「スタイリッシュ」なワーキングマザーを目指したいと思っている。また、そのような女性が増えて欲しいと思う。

今回は、私の妊娠に気付いた直後から現在までのライフスタイルの変化、また仕事や生き方に対する考え方の変化をまとめてみた。将来のワーキングマザーに少しでも参考になれば、と思う。

妊娠に気付く

妊娠していることに気がついたのは、2002年に入ってからすぐのことであった。ちょうどそのころ、同期の男性と二人で新しい企画を考えており、役員に対するプレゼンテーションを控えていた。入社して10年。これまで仕事中心の毎日で、突っ走ってきた。やっと大きな企画を自分で立ち上げ、実現できそうな時期のことだ。他部署の同期と一緒に仕事ができることにも喜びを感じていた。正直言って、そのときは、妊娠して嬉しいというより、これからどうなるのか不安で仕方がなかった。今、進めている企画はどうなるのか。上司には、いつ言おう。いつまで仕事を続けることができるのか。周りの同僚からはどう思われるのだろうか。出世は当然遅れてしまうんだろうな、など今まで経験したことのない不安がいくつも頭をよぎった。

上司には、2月末に報告した。やっと安定期に入ったところで、体型の変化もほとんどなかったが、人事異動の時期を見据えながら、上司が我々の仕事の担当を決める前に伝えることにした。同僚になるべく迷惑がかからないように、と自分なりに気を使ったつもりだ。同時に同僚にも少しずつカミングアウトした。幸い、私の部署には、すでに先輩ママさん

が数人いたので、同僚にもそれほど驚かれず、また迷惑そうな顔もされなかった。

実は、同僚よりも、私が母親になるという現実を受け入れられなかったのは、自分自身だった。今までバリバリ音がしそうなぐらい仕事に没頭した毎日だった。趣味も仕事、と言えるほど楽しく仕事をさせてもらっていた。この生活スタイルが、出産後、どのように変わるのか当時の私には想像もつかなかった。

たまたま、つわりがなく、胎児も順調に成長していたので、妊娠5ヶ月目に入ったところでニューヨークに1週間出張してきた。その後も産休に入るまで毎日、妊娠前と変わらず夜中まで働いた。大きなお腹を抱えながら、シンポジウムの現場を仕切ったこともあった。今、考えると恐ろしいことをしていたなあ、とつくづく思う。でも、とにかく後悔しないよう、思いっきり仕事をしよう、と心に決めたのである。

同期と一緒に進めていた企画について、副社長にプレゼンする日までは、会社に来よう、と目標を定めた。その日は、出産予定日の1週間前であったが、なんとか実現できた。その5日後、出産した。

出産・育児

経験するまで、とにかくお産が大変なのだばかり思っていた。確かに出産は大変なことではあったが、実は、妊娠中の約10ヶ月、またそして、出産後の育児が想像以上に大変であった。3時間ごとの授乳がとにかく辛かった。これが、1年半続いた。いつになったら、私は連続して6時間寝られるのだろうか、といつも思いながら過ごしていた記憶がある。入社以来ずっと残業をして、睡眠不足な日々を過ごしてきたが、それとは比較できないほど辛い。とにかく、自分の思い通りに何もことが進まず、ベビー中心の生活。仕事は、ある程度、自分が立てた計画通りに進めることもできたし、コントロールも可能であった。が、育児は違う。泣きそうな毎日だった。

復帰の準備

出産後の4月に子供を保育園に入園希望する場合は、前の年の12月に区役所に願書を提出しなければならない。資料を区役所に取りに行き、通える保育園を調べる。私は、いくつかの保育園に子供をベビーカーに乗せて、歩いて行き、実際に毎日通える場所なのか、また自分と子供にあっていそうな保育園なのか、シミュレーションしてみた。距離的に通えそうな保育園は2、3カ所しかない。第三希望まで書いて提出する。4月から通わせる保

育園がどこになるのか、区からの通知は2月まで出ない。どこにも入れてもらえない可能性もないわけではないので、区の保育園のほかにも、東京都認定保育室にも相談をしたり、ベビーシッターさんを雇うことなども考えたりしてみた。区の職員はあまり親切な対応をしてくれず、第一希望の保育園に入れるかどうかは、結果が出るまで待つしかなかった。

復帰

幸い第一希望の保育園に入園することができた。4月から子供を保育園に預け、復帰の準備をし始めた。7ヶ月間子供とべったりの毎日を過ごしてきたので、子供と離れるほうが辛くなっている自分がいた。7ヶ月前の自分とは、まったく違う。私が保育園から去ろうとすると、泣きわめく我が子を見ると、後ろ髪を引かれる思いだった。一方で、また仕事に戻れる嬉しさも感じていた。出産、育児休暇取得を経て、おばさんになってしまったのではないだろうか、世の中から取り残されてしまったのではないか、という不安もあった。会社に着ていくスーツをすべて新しくして復帰した。

復帰して、最初の一年

私が勤務している会社では、子供が満3歳になるまでの間は、1日1時間の育児時間をもらうことが可能だ。私の勤務時間は、本来9時半から5時半だが、4時半で帰ることができるよう申請をしている。しかし、子供の具合が悪くなった時以外は育児時間は、使わないことにしている。その代わりに、残業はせず、5時半には会社を出よう、と決めた。会社から保育園まで20分弱。6時までには、必ず保育園に迎えに行くようにした。

しかし、今まで毎日夜中まで残業をしていた私である。本当に残業なしで仕事ができるのか不安だった。同僚も、昔の私がこなしていた仕事量、そして、同じだけの質を求めてくる。5時半になっても打ち合わせや会議が続き、抜け出すのに最初は勇気がいった。しかしありがたいことに、徒々に周囲の人が私のワーキングスタイルを理解してくれるようになり、なるべく夕方には、打ち合わせや会議を入れないようにしてくれるようになった。もしくは、そのような打ち合わせには、私には声をかけないようにしてくれるようになった。私も、仕事の効率を最優先して考え、以前よりも頭を使って仕事をするようになったと思う。会社にいることができる時間は決まっている。その限られた時間の中で、今、やるべき仕事は何かを考え、一番高いクオリティーをアウトプットするよう心がけた。反対に、私でなくてもできる仕事は、アウトソーシングするようにし、私にしかできない仕事

を率先してやるよう努めた。

仕事を終え、保育園に迎えに行く。帰る支度をしてベビーカーを押して帰り、家に到着すると、スーツを脱ぎ捨て、授乳。その後、機嫌が悪いときは、ずっと抱っこをして過ごす。お風呂に入れて、寝かしつけて、ほっとする時間も束の間、また授乳の時間。と、この繰り返しだった。体力的には辛かったが、子供の成長を見ながら、自分がやりたい仕事もできることに本当に幸せを感じていた。出産前の半年間進めていた企画の仕事に戻ることができた。復帰後なにより嬉しかったのは、出産・育児を経験することにより、ほかの男性の同僚が思いつかないような提案ができるようになっていく自分を発見したことだった。

復帰して半年以降

子供が歩けるようになり、授乳する必要がなくなり始めてから、生活のリズムが安定してきた。少しずつ、子供もまとまって寝る時間が長くなり、私も会社にいる間、終えることができなかった仕事をメールで自宅のパソコンに送り、夜、子供を寝かしつけてから、家で「残業」することができるようになった。

結局、今は、6時15分ごろまで会社において、保育園に到着するのは、6時半を過ぎてしまう。家に到着するのは7時前。そこから10時に子供が寝るまでの3時間を子供と過ごす。仕事のことはできるだけ考えないようにして、生活にメリハリをつけているつもりだ。

育児と仕事を両立しにくい社会

私の場合、保育園が自宅と会社の間にあること、また、通勤時間がもともと約20分と短いこと。また、保育園が子供を最大夜7時まで預かってくれること。さらに、職場の上司や同僚に理解があり、助けてくれることや、主人も育児や家事を積極的にしてくれていることで初めて育児と仕事の両立が可能となっている。色々な条件がそろわなければ、今の日本では、なかなか育児と仕事を両立することが難しい。働く女性が子供を産まなくなり、少子化が進んでしまうのも仕方がないと思う。少子化を止めようと思うのなら、政府は本気で支援策を考えるべきである。また早急に支援活動を実施するべきである。大切なのは出産・育児を経験した働く人々の声をもっと聞き、参考にすることなのだと思う。なぜなら、出産・育児と仕事を両立することの大変さは、経験をしなければわからないことが多いからだ。

育児か仕事か

日本経済新聞の、元旦の一面に、弊社と女性向けインターネットサイト運営会社イー・ウーマンが、働く女性を対象に実施したネット調査の結果を掲載していた。結果報告によると、子どもを持つ人の過半数が「子どもを持つことは仕事にもプラス」と回答した反面、子どものいない人の六割弱が「子どもは仕事にマイナス」とみている。私も、出産する前は、子どもを持ちながら仕事をするなんて想像もできなかつたし、当然仕事にマイナスになるであろうと思っていた。出産する前の段階では、出産後の自分のライフスタイルを想像するのは非常に難しい。今までは、人生の様々な局面で、アドバイスをもらったり、相談をしたりする相手が常にいたような気がする。受験をする際には、学校の先生や先輩がアドバイスをくれた。就職する際も、OB・OG訪問や、就職活動をすることによって得られる情報が多く存在した。しかし、仕事をしながら育児をしている人から話を聞く機会は、残念ながら少ないのが現実だ。自分の親の世代は、結婚や出産を機に仕事を辞めることが当然のことであつただろうし、まだまだロールモデルとなるようなワーキングウーマンの数は多くはない。もう少しこのような機会が増えればいいのと思う。

もし、私が今「子どもは仕事にマイナスであるか、それともプラスであるか」と問われたとしたら、きっと「両方」と答えるだろう。出産前まで同じ条件で仕事ができているか、と言われると、それは、絶対にNOだ。しかし、プラスになっていることが多いのも事実だ。だが正直なところ、今の私にとって「子どもは仕事にマイナスであるか、それともプラスであるか」という質問は、まったく意味がない。「子どもが人生にマイナスであるか、それともプラスであるか」それが重要なのだと思う。この問いに対しては、確実に「プラス」であると宣言する。育児には、仕事では味わえない喜びや楽しさ、感動がある。親自身も成長する。まだまだ両立は難しいが、自己実現が可能な仕事をしながら、育児もできるという贅沢な生活を私は大いに楽しみたいと思っている。

最後に

今回、城西大学女子短期大学部の20歳前後の学生に私の経験をシェアすることができ本当に良かった。私自身にとっても新しい発見があつた。学生に「結婚をしたら、仕事を辞めるか」という質問に対し、YESと答えた人は殆どいなかったのだが、「出産をしたら、仕事を辞めるか」という問いに対しては、殆どの人がYESと答えた。むしろ、「出産をしても仕事を続けることは可能だと思わなかつた」という驚きの反応が多かつた。また講義

の始めでは「子どもがかわいそう」という意見もあった。しかし、講義後には、「出産しても仕事を続けるという選択肢があることがわかった」と言ってくれた人も多かった。

社会人経験のない若い彼女たちには、結婚や出産は、まだまだ未知の世界のことである。

しかし、彼女たちが結婚や出産を経験するであろう10年後は、今よりも確実に女性の社会進出が進んでいる。むしろ女性の労働力が必要とされている可能性が高いと思う。ワーキングウーマンが増え、働きやすい環境が今よりもずっと整っているかもしれない。仕事と育児の両立が贅沢なことではなく、当たり前のことになっていて欲しい。そのためには、我々の世代が、メリハリの効いた「スタイリッシュ」な働き方と「肩に力が入っていない」生き方を目指し、後輩の女性たちもワーキングマザーになりたい、と思ってくれるよう心がけたいと思う。